

石郡英一の

## “老話”

介護職に聞いてほしい  
高齢者と家族の物語

## 第5話

## 心の壺

いしこおり・えいいち

日本福祉介護総研株式会社代表取締役会長。医療・介護運営教育コンサルタント。看護師／救急救命士。学校法人美芸学園理事。病棟看護長、老健管理部長、身体障害者療護施設事務長を経て、介護保険施設などの運営教育コンサルタントを行う会社を設立。役者かと思うほどの演技とユーモア、現場の方が、思わずうなずいてしまう体験を豊富に持っている人気の講師。主な著書に『介護現場の困ったスタッフを戦力に変える指導法』『医療依存度の高い高齢者のケア』『身体機能の低下した重度利用者のケア』『石郡流 施設看護師のデキる仕事術』（いずれも日経研出版）がある。

## 1. ほんそご

〈1〉

「おばあちゃん、<sup>しんじこ</sup>穴道湖に夕日  
が沈む時って、本当に綺麗だ  
ねえ…」

「そうだねえ…」

「あの色はおばあちゃんの色だ  
わ！」

「おばあちゃんの色？」

「そう！ 優しい色」

「優しい色？ ありがとう。  
なっちゃんはほんに素敵な表現  
をするねえ」

穴道湖畔の松江市南にある白  
<sup>かた</sup>瀉公園から眺める晴れた日のサ  
ンセットと、その後続くマジッ  
クアワーは、<sup>こんじき</sup>金色の空と湖面が

溶け合う幻想的な風景である。

3月下旬のある日、山田ヨシ  
ノは7歳になる孫の夏美を連れ  
て、実家である錦織家に、お金  
の借り入れを依頼しに訪ねた。  
その帰り道、サンセットに引き  
寄せられるように白瀉公園へ立  
ち寄り、その光景を、夏美と2  
人で芝の上に設置されたベンチ  
に座って眺めていた。公園の時  
計の針は18時半を少し回って  
いた。その眼前に広がる穴道湖  
の光景は、ヨシノを感傷的にさ  
せた。

「なっちゃん、あんたのお母さ  
んね…」

すると、ヨシノの隣に座って  
いた夏美は、間髪入れずにヨシ  
ノの言葉を遮った。

「おばあちゃん、私のお母さん  
は死んだけん」

ヨシノは、“お母さん”とい  
う言葉に強い拒絶を示す夏美の  
態度に慌てた。

「あ～!! そげだったね…ごめ  
ん、ごめん。なっちゃんはおば  
あちゃんの“ほんそご”だけん  
ね…“ほんそ、ほんそ”…」

とっさにヨシノは、出雲弁で  
“可愛い”という意味を表す“ほ  
んそ”と、“可愛い子”という  
意味を表す“ほんそご”という  
言葉を繰り返し夏美に伝えて頭  
をなで、その場を取り繕った。  
「そうだ！ なっちゃん、勝美  
屋でおいしいおうどんでも食べ  
て帰ろうか？」

「おじいちゃんが家で待ってい  
るから…。おじいちゃんの作っ

たパンを3人で食べた方がおい  
しいけん！ 家で食べる！」

「そげだね。おじいちゃんがおい  
しいパンをこしらえて待ってい  
るもんね！ なっちゃんはほん  
に優しい子だねえ…ほんにほん  
そごだわ！ ほんそ、ほんそ…」

再びヨシノは“ほんそ”とい  
う言葉を繰り返し、夏美の頭を  
なでた。

〈2〉

ヨシノは1913年、鳥根県の  
農家である錦織家の長女として  
生まれた。錦織家は江戸時代か  
ら続く庄屋の家系で、豊かな暮  
らしを営んでいた。ヨシノの祖  
父母、両親ならびに、ヨシノの  
上の2人の兄は、一人娘のヨシ  
ノを<sup>すこぶ</sup>頗る可愛がった。そのよう  
な環境で育ったヨシノは、幼い  
頃から穏やかで優しい性格を持  
ち合わせていた。

ヨシノは22歳の時に見合い  
で、製パン業を営む山田<sup>すけきち</sup>助吉の  
家に嫁ぎ、後に三女一男を儲け  
た。パン屋は助吉が興した店  
で、店名は「山田製パン」と  
いった。結婚当時、助吉はヨシ  
ノより10歳年上の32歳だった。

助吉はヨシノの隣町の農家の  
次男坊として生まれ、学問に優  
れていると評判の人物であった。  
助吉は学問が優秀なことに加え  
て、幼い頃から好奇心が旺盛で  
活発な一面を持ち合わせ、家業  
の農業より商売を好んだ。また、  
助吉は次男ということもあり、  
尋常高等小学校卒業後しばらく  
家業を手伝っていたが、19歳の

時に家を出て、大阪の製パン工場で8年間修業した後、松江市内において30坪の敷地と建物を借り、パン屋を独立起業した。

助吉は愛想がよく、誰からも好かれた。その上、助吉は真面目に朝早くから夜遅くまでよく働き、パンの研究に余念がなかった。そのため、山田製パンは開業当初から「ご主人が誠実で信頼でき、パンがおいしい」と評判が立ち、どのパンも飛ぶように売れた。

助吉は、独立起業から2年後に山田製パンを会社組織とし、社長に就任すると同時に店舗を増築していった。ヨシノが助吉の許に嫁いだ頃には、山田製パンはすでに店舗を300坪にまで広げ、従業者を20人あまり雇用するに至っていた。

助吉は結婚し子どもを儲けると、家族のためにと一層仕事に励んだ。この頃、日本で学校給食が始まった。そこで助吉は積極的に営業を行い、全国でも珍しい学校給食のパンを受注し、事業の拡大を図っていった。その結果、山田製パンは開業から僅か8年で800坪にも及ぶ店舗ならびに工場を持ち、50人余りの従業員を雇用するまでに拡大した。

しかし、順風満帆に見えた山田製パンも、第二次世界大戦が開戦すると一気に経営が傾きはじめた。そして、学校給食が中止となると、さらに売り上げが激減した。頼りの労働力も、男

子従業員は軍人として召集され、女子従業員は軍事工場での労働に駆り出された。その結果、助吉が40歳の時、山田製パンは開業から13年で閉店を余儀なくされた。

また、山田製パンを閉じる1年前に助吉が結核を患った。当時、結核の治療費は高額で、完治するのに2年もの歳月を要した。その治療費を支払うために、蓄えていたお金はみるみるうちに底をつき、山田製パンを閉めた後は、店舗や工場をも売り払わなければならなくなった。

しかし、幸いにも、この病のお陰で助吉は戦地に出向かずに済んだ。このことで、終戦時、山田家は4人の子どもを抱えていたが、戦後の混乱期に商売好きの助吉が闇市でパンを売って生計を立てたため、それなりに充実した生活を送ることができた。

そして助吉は、闇市で儲けた資金を元手に、手放した土地の一部を200坪ほど買い戻し、パン工場を建て替え、パン屋を再開するに至った。店名も「山田ベーカリー」と改め、心機一転立ち上がった。

その後学校給食が再開されると、山田ベーカリーは学校給食のパンを再び受注し、順調に売り上げを伸ばしていった。しかし、この時助吉は50歳を前にして、以前の経験で得た“塞翁が馬”の教訓から、店舗は自分一人で管理できる規模で抑え、安定した経営ができるようにと

考えていた。

事業を再開して10年も経つと、山田ベーカリーは従業員を10人ほど雇用し、安定した経営を行っていた。しかし、山田家は大きく様変わりし、気が付けば助吉とヨシノの夫婦だけの所帯となっていた。

24歳の長女の豊子と22歳の次女の明子はそれぞれ結婚し、いずれも松江市内で幸せな家庭を築いていた。三女の文子は20歳となり、京都にある女子短期大学を卒業後、京都の呉服店で働いていた。末っ子の長男の秀雄は18歳となり、高等学校を卒業した後、山田ベーカリーの後継者として、修業を名目に兵庫県西宮市にある食品会社に営業職として就職していた。

ヨシノは子どもとのかかわりの中で、末っ子の秀雄には過保護なところがあった。秀雄が嫡男ということもあるが、秀雄が生まれた年は戦争の最中に加えて助吉の看病にかかりきりで、「親として当時何もしてやることができなかった」という強い思いがヨシノの負い目となっており、無意識のうちにそのようなかかわりとなっているようだった。

しかし、秀雄は両親の優しさに包まれ、伸び伸びと育っていった。また、戦後物心がついでからの秀雄は、助吉が闇市で得た食料でひもじい思いをすることなく育てられ、高校生にもなると、当時の平均身長を20cm

近くは上回るであろう178cmにも及ぶ背丈になった。さらに、秀雄は陸上競技が得意で、高校時代に出した100m走の手動タイム11.2秒の記録は当時の松江記録にもなった。

このような秀雄の成長を、助吉、ヨシノは頼もしく思い、助吉は秀雄が山田ベーカリーの後継者になってくれるものだと思っていた。

ところが、社会に出てからの秀雄は、家で両親に守られ、伸び伸びと育てられた環境とは異なる現実の厳しさに遭遇して困惑した。次第に嫌なことは避け、楽なことばかりを行うようになり、刹那的な行動が目立つようになっていった。年齢を重ねるに連れてその傾向は強まり、親の期待に応えるどころか、わがままな振る舞いを繰り返すようになった。

手始めは結婚だった。関西に出て行ってから1年半が経過した20歳を迎える年の正月に、親に便りの一つも寄せさずに過ごしていた秀雄が、日奈子という1歳年上の女性を連れてひょっこりと戻ってきた。

その時、秀雄は両親に「彼女は高尾日奈子といい、日奈子は自分の子どもを宿して4カ月になるため、籍を入りたい。日奈子の実家は松江市内で旅館を営んでいる。日奈子とは自分の勤める食品会社の同僚として出会った。その後、同郷であることを知り、意気投合して結婚に

至った」と、事の顛末を掻い摘んで話した。

助吉とヨシノは、あまりに突然の出来事に、その事実をすぐに受け入れることができなかった。しかし、数日間悩み、思いを反芻するうちに、日奈子のおなかの中にいる、未だ見ぬ孫への希望の前には、その事実を認めざるを得なかった。

秀雄は正月のうちに日奈子の実家である高尾家でも同様の振る舞いを見せ、高尾家を困惑させたが、高尾家においても山田家同様、希望の前にその事実を認めざるを得なかった。

そこで両家が話し合った結果、世間体を考え、日奈子のおなかが大きくなる前に祝言を挙げようと、型通りの挙式を執り行った。斯くして19歳の秀雄と20歳の日奈子は、晴れて夫婦として世間に周知されることとなった。

その後、2人は女の子を授かった。女の子の名前は助吉が「夏美」と命名した。子どもが生まれると秀雄は食品会社を辞め、日奈子と夏美を連れて山田家に戻ってきた。それからの秀雄は、山田ベーカリーを継ぐべく厨房で働き、日奈子は家事を手伝いながら子育てを行った。

その様子に、助吉はこれからの山田ベーカリーの行く末を期待し、ヨシノは内孫の愛らしさに歓喜した。この時、助吉とヨシノの2人は、この幸せが末永く続くものと信じて疑わなかった。

ところが、秀雄のわがままな振る舞いは、次第にエスカレートしていった。

秀雄は山田ベーカリーの厨房で働きはじめて半年も経つと、「仕事に嫌気がさした」と言い、突然厨房での仕事をやらなくなった。代わりに店の売り上げ金を持ち出しては、営業と偽って外出し、競馬などの博打、飲酒、女性関係にのめり込むようになった。その事実が明らかになると、助吉は秀雄を窘め、売り上げ金を厳重に管理するようになった。ところが、秀雄は助吉の忠告には耳を傾けず、家のお金が持ち出せないとなると、親戚や友人などから借金を重ね、挙句の果てには高利貸しにまで手を伸ばして遊び続けた。その結果、借金が膨らみ、秀雄の信頼は失墜した。しかし、秀雄の作った借金を、商売上の信頼を失わないために渋々助吉が肩代わりするため、秀雄の遊び癖が止むことはなかった。

その様子を見ていたヨシノは、秀雄の非と、過保護に育てた自らの非を無意識の中に押し込み、『嫁の日奈子がうまく夫を管理できないから、優秀な秀雄がこうなった』と云わんばかりに、「結婚してから秀雄は家に帰ってこなくなったわね」などとあからさまに皮肉を云うなど、その矛先を日奈子に向けるようになった。

秀雄のわがままな振る舞いと、ヨシノの追及に耐えかねた日奈

子は、山田家に入って3年目に  
入った8月の暑い日に、夏美を  
連れて衝動的に山田の家を飛び  
出した。しかし、結婚までの経  
緯が経緯だけに、気が引けて実  
家には帰れず、友人の家を1週  
間渡り歩いた。

1週間が経ち、これ以上友人  
に迷惑は掛けられないと観念し  
た日奈子は、仕方なく実家に戻っ  
た。しかし、無断で1週間も家  
を空けたため、山田家では日奈  
子と夏美の安否を巡って、警察  
沙汰になるほど大事になってい  
た。

2人の安否が確認されると、  
山田・高尾の両家に脱力感を伴  
うほどの安堵の空気が流れるが、  
すぐに山田家はその安堵の感情  
を怒りに変えた。事の発端を  
作った秀雄までが怒りを露わに  
した。日奈子の両親も、日奈子  
の心情には理解を示したが、  
取った行動には承服しなかった。

結局山田家の怒りは収まらず、  
秀雄と日奈子は離婚の運びとな  
り、夏美は山田家が引き取るこ  
ととなった。しかし夏美を引き  
取ることもなっても、秀雄に親  
としての自覚が芽生えることは  
なく、それどころか前にも増し  
て遊ぶようになった。秀雄は離  
婚後3カ月も経つと借金取りに  
追われるようになり、信用をな  
くして遊ぶ場もなくし、知らぬ  
間に松江の地からいなくなった。

残された夏美は、2歳から両親  
のぬくもりを失った。助吉  
61歳、ヨシノ51歳の時から、祖

父母と孫の3人での生活が始  
まった。

3人家族になってからという  
もの、助吉とヨシノは夏美のた  
めに懸命に働いた。2人は夏美  
を我が子のように可愛がった。  
2人にとって夏美の成長は何よ  
りの楽しみであり、生活の張り  
となった。その頃、折しも時代  
は高度成長期の最中にあり、山  
田ベーカリーの売り上げも順調  
に推移したため、生活に困るこ  
とはなかったが、相変わらずの  
秀雄の無心のせいで、山田家  
がお金を蓄えることはなかった。

松江を出て行った秀雄は、自  
分の行先を明かさなかったが、  
無心の電話は助吉とヨシノの許  
に月2〜3度掛かってきた。そ  
の要求は1回につき10万〜20  
万円で、月に60万円に及ぶこ  
ともあったが、助吉とヨシノ  
は、秀雄の更生を信じてお金を  
工面し、秀雄の指定する場所に  
送り続けた。店の売り上げで足  
りない時は、親戚や友人に頭を  
下げてでもお金を工面した。

秀雄の遊び癖は、松江を出て  
行って5年が経過しても治まら  
なかった。その頃には長女の豊  
子、二女の明子に続いて三女の  
文子も結婚し、それぞれが幸せ  
な家庭を築いていた。助吉とヨ  
シノは3人の娘がそれぞれ嫁ぎ、  
それなりの道を歩んでいること  
に安堵しながらも、秀雄の体た  
らくには胸を痛めた。

<3>

その日ヨシノは、秀雄の無心

に応じるため、実家の錦織家へ  
お金の借り入れを頼みに行った。  
その際、夏美のお守りをする者  
がいないため、仕方なく夏美を  
連れて錦織家へ出向いたのだ  
が、錦織家で「お金を借りに来  
るのに、子どもをだしに使うと  
は…」との叱責を受け、情けな  
い思いから気分が沈んでいた。

その帰り道に寄った白潟公園  
で、宍道湖の空と湖面が溶け合  
う金色のマジックアワーを見た  
時、夏美にその光景を「おばあ  
ちゃんの優しい色」と形容され、  
「優しい」という言葉にヨシノ  
は反応した。その時ヨシノは5  
年前に犯した過ちを思い出した  
のである。秀雄の非と自らの非  
を無意識の奥にしまい込み、日  
奈子を責め、山田家から追い出  
す形になったことを悔いていた。  
また、日奈子が家を去って間も  
ない頃、まだ物心もつかない夏  
美が自分の乳房を吸おうとする  
仕草を見て、夏美の失ったもの  
の大きさを肌で感じた時から  
ずっと、5年もの間自分の過ち  
を悔いていた。そのことで、ヨ  
シノは自分には優しいと形容さ  
れる資格はないとやるせない気  
持ちになった。

事実を知らない夏美にその旨  
を詫びたところでどうにかなる  
ことでもないのだが、情けない  
思いと、やるせない思いとが混  
ざり合い、感傷的になったヨシ  
ノは「なっちゃん、あんたのお  
母さんね…」と、日奈子への後  
悔を口にしようとした。すると

夏美は「私のお母さんは死んだけん」と言い放った。その言葉の裏には、夏美が母親を強く慕う気持ちを打ち消すことで、自らの寂しさを無意識の奥にしまい込もうとする感情と、育ててくれている助吉とヨシノへの気遣いがあることに気がついた。

そのいじらしいほど健気な母への思いと自分への気遣いがヨシノの胸に突き刺さり、『ごめんね、ごめんね』と何度も何度も心の中で夏美に詫言った。同時に、夏美に対する自分の愛情を強く伝えることで、夏美の寂しさを慰めるよう「なっちゃんはおばあちゃんの“ほんそご”だけんね…“ほんそ、ほんそ”…」と応じたのである。

その頃山田家では、ヨシノと夏美の帰りを、助吉と助吉手作りの特製パンが首を長くして待っていた。時計の針が19時を指し、助吉が2人の安否を案じていたちょうどその時、マジックアワーを見終えたヨシノと夏美が帰ってきた。

夏美は助吉の思いに呼応するように、「ただいま！」と家に帰り着くや否や、一目散に洗面所へ向かい、食事の手洗いを済ませると、パンがきれいに並べたあるちゃぶ台の前に正座した。

いち早くちゃぶ台の前に正座した夏美は、夏美の後を追って手を洗いに行った助吉とヨシノが食卓まで来るのが待ちきれないというように、指を口に<sup>くわ</sup>銜えたり、二人を手招きしたりし

た。その仕草は、夏美のために心を込めてパンを用意していた助吉をたいそう喜ばせた。

助吉とヨシノの2人が食卓に着くと、夏美はすかさず手を合わせ、真っ先に「いただきます！」と挨拶すると、目の前にあるパンに手を伸ばし、パクリとかぶりつき、おいしそうに頬張った。パンを頬張る夏美の顔を眺めながら、今度はこらえきれずに助吉が声をかけた。

「なっちゃん、今日のパンはどげかね〜？」

「おじいちゃんのパンは世界一美味しいわ！ ねえおばあちゃん！」

「そげだね」

「おじいちゃん、今日の夕方、おばあちゃんがおうどんを食べて帰るか？ って云ったけど、私がおじいちゃんのパンが食べたって云って真っ直ぐ家に帰って来たけんね〜！ だから夕食は、おなかいっぱいおじいちゃんのパンを食べるけんね！」

「いいよ、いいよ…好きなだけ食べるだわ。なっちゃんに食べてもらえばパンも本望だが…おばあちゃん、なっちゃんはほんにほんそごだが…」

「そうだね…ほんにほんそごだが…」

自分のつまらぬ感傷で夏美を傷つけたと後悔していたヨシノだが、屈託のない夏美の仕草と、助吉の夏美への溢れんばかりの愛情に救われた気がした。

## 2. 心の壺

夏美が中学1年生になった年の盆休み前の8月12日に、二女の明子が小学4年生になる息子の洋治を、三女の文子が幼稚園に通う息子の隆文を連れて山田家に帰省してきた。

夏美は、明子と文子がヨシノと一緒に山田家でゆっくりでき、また墓参りができるようにと気を回し、2人が帰省してきた翌日から3日間、毎日朝から夕方まで洋治と隆文を連れて穴道湖畔にある白瀉公園に行き、虫取りをしたり、湖で釣りをしたりして過ごした。

そのため洋治と隆文は、夕食を終えると、20時には倒れ込むように眠った。そのお陰でヨシノと明子と文子の3人は、3日を通して1日中ゆっくりと時間を使い、墓参りに行ったり、食事の支度をしたりしながら、お互いの近況を大いに話し、楽しい時間を過ごした。

2人が帰省して4日目の食事を終えた20時過ぎ、助吉を交えた親子4人と夏美が、遊び疲れて眠り込んでいる洋治と隆文を横目に、ちゃぶ台のある居間で話していると、話題は夏美の話題となった。

「それにしても夏美ちゃんは大きくなったわねえ。背丈もだけど、人間としても大きくなったわよねえ。洋治のお世話も上手にしてくれて、私驚いちゃった」「本当にいいおねえちゃんになっ

て。隆文も夏美ちゃんにすっかり馴染んじゃって、おねえちゃん、おねえちゃんって、離れないんだから。毎日お父ちゃんやお母ちゃんのお手伝いもしてくれているんでしょ？」

明子と文子が夏美を褒めると、目尻を下げてヨシノが答えた。「なっちゃんは、掃除、洗濯、炊事と家の手伝いもほんによくしてくれるわねえ」「そうよね～お母ちゃん助かるわよねえ。本当にいい子に育ててくれて伯母ちゃんうれしいわ。それに引き換え…」

そう文子が口にすると、文子の嘆きに呼応するかのよう、居間に設置してある黒電話が居間にけたたましく鳴り響いた。

「びっくりした！」と文子が首をすくめると、すかさず助吉が受話器を取った。

「はい。山田です」。すると、電話に出た助吉の声音が途端に曇った。

「何だ?! えっ、またか?! 30万? ない、ない、そんなお金がどこにあるんだ!! うん、うん、うん…何?! また人様に迷惑かけた?! で、どんな…うん、うん、そんだけなら…うん、うん、うん…今度こそちゃんとやれるのか? 分かった!」

その助吉の曇った会話から、電話の主が誰であるのか誰もが容易に想像がついた。助吉の電話中、そこにいる誰もが嫌悪に顔をしかめ、言葉をなくした。

助吉が電話を切ってから、誰も口を開こうとしなかったが、しばらくしてばつが悪そうに文子が口を開いた。

「“呼ぶより<sup>そし</sup>謗れ”って云うから、私が秀雄を呼んだのかも…。でも、秀雄ももう30歳を超えたい大人なのに、いつまで経ってもあれではね…」

文子が誰に言うともなくつぶやくと、助吉が答えた。

「わしが甘く育てたけん、こげなことになった…わしが悪いんだわ…」

するとその言葉をヨシノが遮り、文子、明子、夏美の3人の顔を交互に見ながら、丁寧にゆっくりと噛みしめるように語りはじめた。

「人は心に壺を持っている。その壺に入るもんはその人の涙。涙にはさまざまな種類がある。それは嬉しい涙、感動の涙、喜びの涙、優しさの涙などたくさんの白い涙と、悲しい涙、悔しい涙、怒りの涙、つらい涙などたくさんの黒い涙ですけん。壺の中身がいっぱいになると、その涙は溢れてくるけん。溢れ出るもんは優しさだったり、悲しみだったりするけん。つまり、人は白い涙を心の壺にたくさんためると、壺がいっぱいになった時、優しさや思いやり、労わりなんか溢れてくるし、黒い涙を心の壺にたくさんためると、悲しみや嫌悪、怒りなんか溢れてくるけん。昔から“三つ子の魂百まで”と云うけど、幼い

頃に備わった性格は生涯変わらんと云われるけん。私は生まれた時から両親や兄たちからたくさんの愛情を注がれてきたお陰で、心の壺にたくさんの白い涙をためることができたけん。だから、私もお父さんや子どもたちにたくさんの愛情を注ぐことができたけん。豊子、明子、文子の3人が3歳になるまでは、家のパン屋はすごく栄えちよって、3人には十分なことをしてあげられたと思ってるのよ。だから今、あなたたち娘3人は心の壺にたくさんの白い涙がたまり、それが溢れ出し、それぞれ自分の家庭でご主人や子どもに愛情を注ぐことができるんだと思う。でも、秀雄が3歳になるまでは、戦禍が広がったことや、お父さんの病でほとんど構ってやれなかったけん、心の壺に悲しみやつらい涙、つまり黒い涙を流させてしまったと思う。その責任は親にあるけん。でも、カップに入った真っ黒なコーヒーも、ミルクを入れ続ければ最後は白くなるように、白い涙が溢れるよう愛情を注ぎ続ければ、きっといつかは秀雄の心の壺から白い涙が溢れるようになると思ってる。だから、秀雄には愛情を注ぎ続けられないけんと思ってる。そのことはなっちゃんにも云えるからね。この子は2歳までは親の愛情をたくさん注がれていたから、たくさんの白い涙が心の壺にたまっと思いうけど、2歳になって間もなく

両親から離れ、それから3歳までは悲しみやつらさといった黒い涙を心の壺に流さないといけなかった。…お爺ちゃんや私ではその代わりは到底できるものではないけど、お爺ちゃんや私にできる精いっぱい愛情で、なっちゃんの心の壺に白い涙をためさせてあげたいと思っている…」

ヨシノの話聞き皆が涙した。ヨシノの話は、明子、文子、夏美のそれぞれが持つ、すべての不満や疑念・懐疑を払拭するに余りあるものだった。「そうだね…お母ちゃんの云うとおりだね…」

文子が答えると、目を真っ赤に腫らした夏美が鼻をすすりながら答えはじめた。

「お婆ちゃんありがとう。お爺ちゃんもいつもありがとう。お婆ちゃんの素敵な話を聞いて、今までお婆ちゃんやお爺ちゃんが、どんな思いで私を育ててくれたのかがよく分かったけん。お父さんに対しても“どうしてそこまでするんだろう”って、いつも不思議に思っていたけど、それもよく分かったけん。でもね、私は2人から、明子伯母さんや文子伯母さんと同じようにたくさんの愛情をもらってるか

ら、黒い涙は流してないよ。心配せんでいいけんね…また、お父さんもきっと立ち直ってくれると思う」

ヨシノの心のこもった言葉の一言一言が、また夏美の素直な答えが、そこにいる皆に、うれしさや喜び、感動の涙を流させた。

すると文子の横で寝息を立てていた隆文が、寝言で夏美の返答に合いの手を入れてきた。

「本当?!」すると隆文の寝言に、間髪入れずに夏美も返答した。

「本当よ!」

そのかけ合いに全員が声を上げて笑った。